

国内における機関リポジトリ推進者についての調査 ーオーラルヒストリーを用いてー

五十嵐 亮介

日本は、世界第4位の機関リポジトリ数を誇り、国内の国公立大学の7割近くが機関リポジトリを運営している世界でもトップクラスの機関リポジトリ運営国であるといえる。

しかし国内における機関リポジトリの展開においては、行政主導のトップダウン型の取り組みだけでなく、有志らのボトムアップ型の働きが果たした役割も大きい。そのため機関リポジトリの展開の歴史を明らかにするためには、両者を視野に収めた研究が必要であるが、先行研究では前者にのみ焦点が当てられている。そこで本研究では、機関リポジトリを推進した個人に着目し、その動機と活動を調査することで、機関リポジトリ発展の歴史的事実を明らかにすることを目的とする。

調査方法として、まず文献・WWWを用いて機関リポジトリの展開・現在について調査し、次いで文献・WWW調査の結果を参考にインタビューを選定し、オーラルヒストリー調査を行う。最後に文献調査の結果とオーラルヒストリー調査の結果から考察を行い、結論を述べる。

本研究により、機関リポジトリの展開において「CSI事業による援助」「機関リポジトリであること」「教師役の存在」の3つの要素が重要な役割を果たした事が明らかとなった。

CSI事業とは、政府よりNIIに委託された事業であり、次世代の学術コンテンツ基盤を実現するためのものである。この事業により各大学図書館に外部資金が供され、技術基盤の整備及び、事業のステークホルダーの交流が促進された。

「機関リポジトリであること」とは、機関リポジトリが本来的に持つ、①必然的に担当者と教員の交流が必要とされること、②成果が自身の所属機関のものとなること、の性質を指す。これにより、①大学内での機関リポジトリの理解が進み、②成果として評価されることにより担当者の意欲が向上したと考えられる。

また、各大学が機関リポジトリを導入、展開していくにあたり、海外の情勢や技術的な事項を教授する「教師役」の人物が存在した。これにより担当者が容易に経験を積むことができたものと考えられる。

先行研究では機関リポジトリの展開において「CSI事業による援助」が重要な役割を担っていたことが指摘されている。しかし本研究により「機関リポジトリであること」「教師役の存在」もまた重要な役割を果たした事が明らかとなった。今後の課題としては「機関リポジトリであること」「教師役の存在」についてより多角的な視点から分析を進めていくことが挙げられる。

(指導教員 逸村裕)